

## 前尾衆議院議長と公明党(3)

平野 貞夫  
元参議院議員

### 三木内閣の成立と政局の変化

1974 (昭和49) 年12月9日、三木内閣が成立する。田中首相が金脈問題で退陣し「権名裁定」で、三木武夫自民党総裁が出現したことによる。三木首相は文部大臣に教育学者の永井道雄を起用し話題となる。翌10日、佐藤栄作元首相がノーベル平和賞を受賞。革新派からブラック・ユーモアとの声が出る。

国会運営は参議院の予算委員会が与野党同数となる。この保革接近はこれまでの自民党絶対多数時代と国会の運営の仕組みをがらりと変えることになる。社会党は三木首相の金脈問題や河本通産大臣の三光汽船株価操作問題を追及すると、自民党は滋賀県知事選をめぐる社会党の黒い霧問題を問題化する。自社談合政

治に変化が出始めた。

この時期、共産党と創価学会は極秘に、「創共協定」の話し合いを進めていた。12月末には合意したが、翌年7月28日まで公表されなかった。三木政権は自民党の近代化と称し、企業献金をなくすとする政治資金規正法改正、選挙の公営を広げる公職選挙法改正、独占企業分割等の独禁法改正等を政権の課題とした。

この時期の野党の国会での方針が面白い。

〈社会党〉野党共闘に埋没しない主体的闘い。

〈共産党〉国政革新のため国民生活の防衛。

〈民社党〉自民党単独政権の最終段階だ。野党側の安易な共闘には応じない。

公明党は「中道政治の実現」が方針だった。

### 前尾衆議院議長は咽頭の前ガン状況で手術へ

1975 (昭和50) 年1月24日、第75回通常国会が再開され本格的国会審議が始まる。実は前尾議長は年明けから時々「喉の不調」で、衆院内の診療所で治療を受けていた。国会審議の中心が参院に移った3月末、聖路加病院で精密検査を受けることになった。結果は「咽頭部分の前ガン状態」の疑い。治療方法について医師団が出した案が「手術と放射線治療」であった。

この治療だと手術後約1カ月間は声を出せない。Speaker (英語)議長) が Speak できなくなる。医師団の責任者は慈恵医大の滝野賢一教授で世界的に知られている咽頭外科の名医だ。絶対完治させると宣言してくれた。医師団の説明だと「咽頭部細胞の異常増殖」で、心配はいらぬが、若い時からの「糖尿と高血圧」の方が心配だとのこと。

問題はどこまで、前尾議長本人に伝えるか。どんな伝え方をするか。この相談に入った。実は、この年に英国のエリザベス女王が5月7日から12日まで国賓で来日することになっていた。国会としてもいろんな行

事があり、前尾議長は楽しみにしていた。本格的治療はエリザベス女王離日後で問題はないとのこと。

医師団の意向は、それで大丈夫だから、それまでに、重要法案で衆院審議を終え参院に送付しておけば、手術で1カ月声が出せない Speaker であってもよいのではないかと、とのこと。問題は、それを非公式であつても与野党に伝えるわけにいかないことである。ともかく連休過ぎまで観察期間とした。

考えた末に、前尾議長をもっとも尊敬している公明党の大久保直彦議連事に相談することにした。咽頭の前ガン状態には触れず、「酒タバコを止めない前尾議長の状態が糖尿と高血圧で長期休養が必要とあった」と説明。「衆院の審議が実質的に終わる連休後の5月中旬から、入院させて治療させたいので協力してほしい」と要望した。

伏木和夫公明党国対委員長と相談した大久保理事から、「政府提出の重要法案の中には、与党自民党が反対しているもの、自社で談合して成立をさせようとしているもの、怠がなくてもよいものなど、いろいろある。選択してどうしても成立させざるべきものを限定して、5月中旬までに衆院を通しておこう」となった。

この公明党の協力があつたので、「前尾議長の咽喉部手術作戦」は成功できた。しかし、さらなる難問が発生する。

5月12日、エリザベス女王が離日し、1週間たつて、前尾議長は東京築地の聖路加病院に入院した。主治医の滝野教授が、これまで説明していない治療方法を話した。1週間後を目途に「咽喉前ガン部分」の摘出、その後の放射線治療。併せて内科で生活管理をするなどであった。本人は「おまかせします」と一言。私に明日朝8時に病院に来てくれと。

翌日、病室に行くこと「これを秋田（大助）副議長に渡してほしい」とのこと。見るとなんと「議長辞職届」であった。驚いた私は「医師団は前尾議長の病状を完治できることで、昨日これからの段取りの説明があつて、了承したばかりではないですか。ご指示に従うわけにはいきません」と大声を出した。

すぐ病室を出て、主治医の滝野教授の部屋に駆け込んだ。事情を話したところ、本人を説得しようとなる。病室に戻ると丁度、静子夫人が見えたところだった。滝野教授は「ご心境が変わられましたか」と、静かに説得を始めた。寡黙な前尾議長が多弁に語り始め

「一晩考えてみよう。平野君、明日午前10時に来てほしい」となった。

翌日、指定の時間に顔を出すと、前尾議長は封筒に入れた書簡を二つ私に渡し、

「咽喉部の前ガン状態の治療に臨むという状況で議長職を続ける心境についての書簡と、辞職願だ。国民に迷惑をかけてはならない。ありがたいことに多くの人が私に協力してくれているが、決して無理をしないでほしい。これ以上は国政に影響が出ると思ったら、秋田副議長に提出してくれ」

5月24日予定どおり手術は成功。術後の回復も順調で、声が出せないことが問題だった。参院審議が混乱し前尾議長に相談したいと、三木首相が毎日のように病室に来て「前尾議長に会わせろ、本当の病気は何か」と、厳しく問い詰めてくる。その時やたらに私の背中や太腿を触ってくるのには参った。

さらに困ったのは、ノーベル平和賞をもらった佐藤元首相が6月3日に急逝し、同月16日に武道館で国民葬を行うことになった。1カ月近く入院している前尾議長の出欠が注目された。出れば衆院議長として弔詞を声を出して読まなくてはならない。

た。「僕は昭和39年秋、盟友の池田勇人総理が喉頭の前ガン状態になった時、退陣を説得した。その僕が咽喉ガンになって、公職を続けることは、世間に対して筋が立たない。なんとしても議長を辞める」。

滝野教授は「日本の議会政治が前尾議長の見識なく健全にならない」等を話し、

「咽喉とは口の中のこと。池田首相の場合、手術が成功しても当時の技術では声は出せなかった。議長の場合、ガンとはいっても細胞の異常増殖といえるものです。手術後の回復と集中放射線の治療で、1カ月ぐらい発声はできないが完治します。ようやく国民から国会が信頼され始めた時、完治できる病気で議長を辞めることは、責任逃れになります」

と、説得が説教になる。「地位にこだわる政治家とは思われたくない。私の美学だ」

と、前尾議長が感情論となる。

「医学の進歩を信用してください。私が手術して治療するので。それで議長職を辞めるとなると、私の立場はどうなるのですか」

滝野教授のこの一言で、事態が変わる。

医師団に相談すると、1週間前から放射線量を減らし2分間ぐらい弱い声を生かせることに挑戦し、見事に成功した。ところが、さらなる難題が待っていた。国民葬を取材していた朝日新聞の記者が、前尾議長の声の異変に気づき取材を始め、これから発声の練習をしようとした6月23日、朝日新聞として「池田元首相と同じ喉頭ガンの疑いがある」と特ダネ予想記事を出す方針を固めた。

確認のため前尾議長周辺の見解を取材すること、私が下町の小料理屋に呼ばれた。そこには園田副議長時代に、公明党と私の縁をつくった柴隆治が政治部政局担当責任者として座っていた。不思議な縁を感じ真相を話した。柴氏は「報道はしない。すれば辞職するだろう。もう辞表を出しているかも。日本の議会政治を守るのはこの人をおいてない」。

かくして最後の難関を突破した。

あれから45年の歳月が過ぎた。安倍晋三首相は病名を偽り、権力私物化のため「自己クーデター」により「菅政権」を成立させた。それに公明党が協力。日本の亡国が深まった。